

久我美子自筆『桂能里の紀行』解題と翻刻

日 高 愛 子

解 題

前号において、「大詢院五十回忌追悼五十首」について紹介した¹⁾。この五十首は、天保六年（一八三五）に京都で行われた肥後熊本藩第九代藩主細川治年の五十回忌に、治年の二女美子（就）²⁾の命によって肥後歌人たちが献じたものであった。『熊本藩年表稿』細川家系図には、美子について次のようにある。

女 就 久我大納言通明卿簾中

天明七年二月廿五日於熊本花畑館誕生

天明七年（一七八七）に誕生。文化二年（一八〇五）十二月に久我通明との縁組願が出され、同四年四月に輿入れした。弘化四年（一八四七）四月十三日逝去、享年六十一。『国書人名辞典』にも「幼少より和歌を好む」と記述されるように、近世後期の肥後を代表する女性歌人である³⁾。

その著作を『新訂肥後文献解題』⁴⁾によって掲げる。

東路日記 写一

細川就姫君

一名東路千代鏡、御道の記とも云う。文化四年三月廿九日江戸を立ち、道を東海道にとり、四月十四日京都今出川の館に着かれた迄の紀行文で、毎日折々の歌廿一首ある。

桂能里乃紀行 写一 細川就姫君

桂の離宮拝観の紀行で文化七年頃の作である。

桜九良木集 版三 久我就姫君

二百七首の歌集である。上巻は四季恋雑七百廿四首で、雑歌中には感傷的の歌が多い。中巻は享和元年から文化六年迄六百四十四首。下巻は文化七年から文政三年迄七百卅九首。両巻共に年次別に載せ、多くは題詠で一題二首ずつ詠んである。

右のうち、紀行文二作については、明治三十二年（一八九九）九月発刊の『女鑑』第一八八号・第一八九号に「思立旅の記 細川治年の女」と題して「東路日記」（東海道御道之記）が、第一九二号（同年十一月発行）に「桂里の記」（桂能里の紀行）が掲載されている。

本稿で取り上げる『桂能里の紀行』は、従来この『女鑑』掲載本文のほかに、熊本県立図書館所蔵の写本が知られていた。宮村典大編『雑撰録』巻三十五に「就君様桂の里御道記／桂能里の紀行」と冠して合写されるもので、末尾に次の識語がある。

文化七年午歳、江村柳溪拝写之源本、古山尹猷伝借謹而写之、卯月廿八日、慶応三卯年三月中旬、木村男吏方ヨリ借用写之
宮村実信

江村柳溪は侍医。古山尹猷は通称常助、春裁と号した。幼くより中井竹山に学び、肥後に下つてからは竹原勘次郎のもとで詠歌に励んだ。『鰻玉集』にも名が載る肥後歌人である。また富士谷成章の五女を妻とし、その学風の影響を受けたとされる⁵⁵。右の識語によれば、文化七年（一八一〇）に柳溪の所持本をもとに尹猷が書写したものを、慶応三年（一八六七）に典太が中老木村男吏から借用し、書き写したという⁵⁶。

一方、先に触れた『女鑑』第一九二号掲載の「桂里の記」には、冒頭に次のように記される。

此紀は細川越中守治年朝臣の末女、就姫の、久我通明卿の簾中なりしころ、ものせられしとぞ。熊本藩士、塩山林常が蔵せるを、写して女鑑にいだしぬ。佐々豊水しるす

塩山林常については伝未詳。佐々豊水もまた肥後藩士で、明治期に『増補肥後国誌』を始めとして多くの郷土史料を蒐集、整理している⁵⁷。『女鑑』掲載本には僅かながら県立図書館本

との異同が見られ、来歴からも別本と推されるが、その所在は不明である。

今回、美子自筆本一卷の存在が明らかとなった⁵⁸。『桂能里の紀行』はこれまで県立図書館本の識語によって文化七年頃の著作とされてきたが、自筆本の巻末には「文化六年記之」とあり、文化六年に桂離宮へ赴いて程なく書かれたものと分かる。桂離宮拝観の目的について、美子はその巻頭で次のように書き記している（濁点・句読点を私に付した）。

そのかみ、京極宮、桂の里に別庄を作り給ひ、春秋のながめをなし給ひしが、いまに猶気色もかはらず、そなはりぬ。こゝに、祠堂たてたまひ、八条宮の尊影のかたはらに先祖幽齋君の御影を安置せられしよし聞て、もとより百でむの心ざしあるに、ことに今年は、世をさり給しより百とせもはや二度めぐり来ぬ。

桂離宮は智仁親王（八条宮）によって造られた別業で、茶屋の一つである園林堂には、智仁親王の尊影と、智仁親王へ古今伝受を行った細川幽齋の御影があった。美子はこの年幽齋二百回忌を迎えることから、その御影を拝すべく、五月十八日に桂離宮へと足を運んだのであった。

幽齋二百回忌は同年八月二十日に行われた。このとき詠まれた「幽齋二百回忌追悼和歌」が永青文庫と大阪市立大学森文庫に蔵される。『桜木集』（桜九良木集）には上冊に美子の追悼和歌が載る⁵⁹。

幽齋公二百回御忌に、秋懷旧

時を得て言葉の花の露の恵ふた、びかゝる百年のあき
めぐみにはむかしの秋も遠からぬみちの光をあふぐ此とき
今かゝる道のめぐみ光得てふた、びめぐる百年の秋

同上、見月忍昔

曇るなよむかしのあきの月ならばゆくすゑてらせ言のはの
道

ひかりのみかはらぬ秋を忍びきていく年月に袖ぬらすらん
幽齋が細川家にとつて偉大であったのは当然ではあるが、と
りわけ美子の傾倒は相当なものであったらしい。『桜木集』中
冊の文化六年の詠草にも幽齋二百回忌に際する和歌の贈答が確
認される。

幽齋二百年、懷旧のこゝろを

はるかにも二度めぐる百年のよを今さらにしたふことのは
百とせのふた、びめぐる法の会にすゑのよ遠くしたふ言の
は

八月十日幽齋二百年の追善なればとて、家にむつび
ある御方々より哥よみて給りけるに、忝さをいさ、か
申のべ侍る

言のはのかゝる手向に遠きよもとむろふ法の光そひけり
昔とふこと葉のたまの数ぐのかしこきほどやかかけてしる
らめ

同集には他にも、

幽齋公御正、当に十首組題中、秋風

末までもみにしみぐと家のかぜ吹つどふ秋の昔しのはじ
などのように、幽齋の忌日に詠じた歌が散見される。島津忠夫
氏¹⁰は、

近世初頭における堂上歌壇の古今伝授のもとをなす幽齋が、
必ずしも堂上歌壇の歌風にはあまり影響を与えていないと
見られるのに、細川家から久我家に嫁した美子を通して、
ここに至つてまた、京都の堂上公家の間で顧みられている
ことが興味深い。

と指摘するが、このことは稿を改めて考えたい。

さて、『桂能里の紀行』では、幽齋の御影を拝した後、美子
の感銘が次のように綴られる。

かずならぬ末の身にて、いま、かゝるかしこき御すがたに
むかひまいらせ、または先祖のいます御ありさまを拝る
ことも、是、ひとへに、いにしへの浅からざりし御恵のほ
ど、かんずる忝さのあまり、中ぐにもふし出むも、は、
かりすくなからねど、いさ、かこゝろ斗にのべ侍る。

言の葉にかゝる契も末とをきめぐみ露の光りとぞお
もふ

美子の歌が、智仁親王への伝授証明状に添えられた幽齋の歌、
古も今もかはらぬよの中に心のたねをのこすことの葉

(衆妙集・雑部下・五九九)

を念頭に置くことは言うまでもない。『桂能里の紀行』には勅

撰集や『新明題和歌集』に拠る和歌が見られるが、

植わたすしづが早苗の一方になびくもすゞし露の朝かぜ
という巻頭歌が、幽斎を偲ぶ旅路に相応しく、

うゑわたすふもとのさなへ一方になびくとみれば山風ぞふ
く(詠百首和歌・二七・「早苗」)

という幽斎の詠を踏まえていることも留意されよう。

加えて、美子を案内した桂宮諸大夫尾崎積興から借用書写した歌学書『玉露稿』(桐葉記)などが永青文庫に残ることに触れておきたい。桂離宮拝観と幽斎二百回忌を契機として、美子の関心は近世前期の堂上歌学へと一層向けられるようになったと考えられるのである。

【注】

(1) 拙稿「大詢院五十回忌追悼五十首―翻字と解題―」(『国語国文学研究』52、二〇二一年)。猶、前号で「天保七年」としたのは「天保六年」の誤り。天保七年には熊本で大詢院五十回忌が行われている。

(2) 記録類では「細川就」「就姫」と記されるが、本稿では『国書人名辞典』ならびに国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」の統一著者名に従い、「久我美子」と称する。

(3) 細川護貞『魚雁集 細川家に残っている手紙』(思文閣出版、一九九〇年)、山口哲子「近世女人文人風土記―肥後国の巻(熊本県)―」(『江戸期おんな考』14、二〇〇三年)等参照。

(4) 上妻博之『新訂肥後文献解題』(舒文堂河島書店、一九八八年)。

(5) 弥富破摩雄『中島広足』第四章・六「古山尹猷」(厚生閣、一九四四年)。

(6) 宮村典太については、『新訂肥後文献解題』の次の記述が参考になる。宮村典太諱は信実、盤桓園の号がある。先祖は岩城主税売吉通と云つて信長の家臣であつたが、其の末葉宮村与次兵衛と云う者が豊前国で忠利公に召出された。十一代目が養子の典太である。実は谷助兵衛の三男で、幼名喜久八、中頃半之允と称した。明治二年十一月三十四歳で相続、千二百石、明治二年三月典太と改名した。宮村氏は加加美又兵衛に次ぐ記録家で其記録中に郷土誌資料の多い処に価値がある。大正七年三月十七日歿、行年八十三、墓所は蓮台寺にある。

県立図書館本に「実信」とあるのは典太の諱であろう。

(7) 佐々豊水について『肥後人名辞典』に次のようにある。

字は少左、蛭村と号す。城北村の人、夙に皇典の学を研究し、造詣深く、殊に国歌を善くす。元細川藩士にして禄三百石、元治慶応の間長門の役に参加して戦功あり、又明治元年陸奥の役及び十年丁丑の役にも参加して功あり。明治四十年五月歿す。享年七十。

(8) 美子自筆本は、二〇二一年九月に舒文堂河島書店より入手し、現在は熊本大学文学部が所蔵している。

(9) 架蔵本により、私に濁点を補った。

(10) 島津忠夫「女流の歌人たち」(『和歌文学講座8 近世の和歌』勉誠出版、一九九四年)。

【付記】

美子自筆本の存在をご教示いただいた舒文堂河島書店、資料の閲覧をご許可くださった熊本県立図書館に心より御礼申し上げます。猶、本研究はJSPS 科研費 18K00306 の助成を受けたものである。

凡例

- (1) 字配りは原本に従った。
- (2) 漢字は通行の字体を用いた。
- (3) 私に濁点・句読点を付した。
- (4) 末尾に注を付し、参考資料・参考歌を示した。また、県立図書館本・『女鑑』掲載本文との異同を示した。

翻字

桂能里の紀行

そのかみ、^①京極宮、^②桂の里に^③別庄を作り給ひ、^④春秋のながめをなし給ひしが、いまに猶、気色もかはらずそなはりぬ。こゝに、^⑤祠堂たてたまひ、^⑥八条宮の尊影のかたはらに先祖幽斎君の御影を安置せられしよし聞て、もとよりまうでむの心ざし

^⑦あるに、ことに今年は、^⑧世をさり給しより百とせも

はや二度めぐり来ぬ。いかにもして拝せむものと、
^⑨宮の諸太夫、尾崎縫殿頭積興朝臣のみちび

きをもて、おもひたち^⑩侍る。比は五月雨の空いと、さへわづらはしきほどなれば、やうく晴間まち

得て、けふは^⑪中の八日といふに、^⑫しのゝめ^⑬すぐる

より家居を出る。空はまだ曇りぬ。いかゞあらんと、

^⑭ながめもてつ、ゆくまゝに、^⑮朱雀野をすぐれば、

日の影おほろながらもさし出る斗に成ぬ。^⑯末広

き田面のいなばのあしたの露のおもげなるを、

^⑰ふき過る風情もおかしく、うち詠めて、

^⑱植わたすしづが早苗の一かたに

なびくもすゝし露の朝かぜ

^⑲かつら川の渡りにつけば、こなたのきしに、ふね

さしよせて、^⑳御たちの人出むかへり。さながらのりて

わたるに、^㉑四方をながむれば、所のさまも清らに

めづらしく、行衛をいそぐ道ならねば、ながめ

まほしくおほゆれども、舟出をいそぐに、ともに急がれて、

^㉒いましはとおもふながめもかつら河

いそぐ渡りにこゝろのこして

すこしかはらを行ば、またせばき川あり。土橋を

わたりてゆく。このはしは、けふのためにとて、もふけ

られたるよし、もろ人のゆき、の橋は、はるかの

しも^㉓にぞ見ゆる。これより御たちはいくほどあらねど、

このさきにしばし行ば、⁽²⁴⁾地ぞう堂あるよし。

⁽²⁵⁾文武天皇の御代、染どの、後の建立にて、ふかくこゝろをよせ給ひ、祈願むなしからず、猶代々にいちしるき御おほえますとて、⁽²⁶⁾積興朝臣の

⁽²⁷⁾物語しよし聞ば、よき序にこそ⁽²⁸⁾まうでめと、まづその方をさして行に、そらは名残なくはれわたり、

日のかげのいとあつきに、わづかの間と聞ど、⁽²⁹⁾山道なれば、かろうじて⁽³⁰⁾いたりつく。⁽³¹⁾地ぞうをふしおがみて、

⁽³²⁾世にひろきちかひと聞ばいま更に

あふぐ心の末もたのもし

⁽³³⁾右の方をみれば、一のしるしあり。よりてみれば、

⁽³⁴⁾文武天皇とするされたり。ま事に思ひもかけぬ

御事に、かたじけなしともふすも、中くおそれかしこみて、はいし奉る。しばしは、⁽³⁵⁾この御堂のかたはらなる⁽³⁶⁾家

居に湯などくみやすらひて、かつらの御たち

へいたる。先、⁽³⁷⁾手あらひ、口すゝぎ、衣服あらためて、⁽³⁸⁾積興

朝臣にあなひをこひ、庭つたひに⁽³⁹⁾祠堂へまうで、八条宮の尊影を⁽⁴⁰⁾拝す。御かたはらの板間に幽齋君

の御影をかけたなり。

⁽⁴¹⁾しらざりき葉すゑの露の身にもいま

むかしをかけてあふぐべしとは

⁽⁴²⁾押し終りて、つくくくと⁽⁴³⁾おもふに、かずならぬ末の身にて、いま、かゝるかしこき御すがたにむかひまいらせ、

または先祖のいまする御ありさまを⁽⁴⁴⁾拝することも、

是、ひとへに、いにしへの浅からざりし御恵の⁽⁴⁵⁾ほど、かんずる。忝さのあまり、中くにもふし出むも、

はゞかりすくなからねど、いさゝかこゝろ斗

に⁽⁴⁶⁾のべ侍る。

⁽⁴⁷⁾言の葉にかゝる契も末とをき

めぐみの露の光りとぞおもふ

家のたゝまひよりはじめ、あなたこなたに、かづを⁽⁴⁸⁾つくせしいらかは、名だゝる人の心をよせて、

みがきしつらはれたるに、また庭前のさま、⁽⁴⁹⁾池の

面、木石にいたるまで、たぐひなし。をろかなる⁽⁵⁰⁾ほどに

言ならべんも、かへりてむげにくちおしくや

あらむ。ふねにのりて棹させば、⁽⁵¹⁾なを風情も

かはりて、⁽⁵²⁾おかしく、

⁽⁵³⁾さす棹のしづくも涼し池の面の

うかべるふねにかよふ夕かせ

このふねのうちにも、⁽⁵⁴⁾おほみきなど給ひければ、日の影かたむくまで、くみかはしつゝ、一しほ興

を⁽⁵⁵⁾もよふして、

⁽⁵⁶⁾ゆふ日影かたむく波に舟うけて

なをもめぐらすけふのさかづき

たそがれになれば、あかずおしけれど、⁽⁵⁷⁾かへりあるに、いつしかともし火とるほどにぞ成ぬ。

暮はてぬれば、⁽⁸⁾よりある⁽⁹⁾かうらんのもとまでも

一ツ二ツ螢の⁽¹⁰⁾飛くるに、ひるみしほたるだに⁽¹¹⁾おもひいで、た、ずみてみるま、に、光のあまた⁽¹²⁾そひぬれば、

⁽¹³⁾飛ほたるかずそふま、に名にしおふ

たにの光もさぞとしらるれ

げに名もしるくぞおほゆる。見るま、に⁽¹⁴⁾いとゞめかるれば、小夜も⁽¹⁵⁾更ぬべしと、帰さをいそぐにも、

⁽¹⁶⁾かへるべきかたもおほえず暮、よに

またひとときはの詠めそへぬる

今朝⁽¹⁷⁾こし河のわたりにいたれば、⁽¹⁸⁾きしにはかぎり火ともしたて、水⁽¹⁹⁾くかららぬ、ふねの行衛もおかしくぞある。

⁽²⁰⁾桂川こぎ行舟のみちみえて

うつるも涼しかぎり火のかげ

朱雀野をもすぎ行、里にあれど、ゆきあふ人もなく、たちならぶのきはも、いとものしづかにて、やうく

夜も更ぬらむとぞ⁽²¹⁾おほる。雨はにはかに降

きぬ。⁽²²⁾いとゞだによる行みちのはかどらず、かろう

じて⁽²³⁾家居にかへれば、はや子之時すぐる

⁽²⁴⁾ほどにもなり侍ぬ。

文化六年記之

美子

之書

【注】

(1) 京極宮 京極宮(桂宮)家。

(2) 桂の里に別荘を作り給ひ 桂離宮は桂宮初代智仁親王(一五七九—

一六二九)により造られた。「御元祖宮智仁親王^{号桂光院}、天正の末つか

た豊太閤より小堀遠江守政一^{号宗甫}に命じて造進し給ふ庭作、古書院等、

是なり」(国立国会図書館蔵『桂離宮』『桂御別業之記』)。

(3) 別庄「別荘」(県立図書館本・女鑑)。

(4) 春秋のながめ 桂川西岸には古くから貴族たちの別荘が造られた。

『うつほ物語』春日詣巻には、「右大将殿、桂に、おもしろきところに、

大いなる殿造りて、花盛り紅葉盛りなどにもしたまひて、心やりたま

ふところあり」とある。

(5) 祠堂 園林堂。智仁親王を継いだ第二代智忠親王(一六一九—一六六

二)によって造営された。『桂離宮』『御庭向』に次のようにある。

園林堂 凡方三間 智忠親王御代被造之

額 文字同上 後水尾帝宸翰

園林文意 寿量品第十六

我此土安 天人常充滿

園林諸堂閣 種々宝莊嚴

維摩 有^下以^下飯食而作^中仏事^上 有^下江園林堂觀而作^中仏事^上

(6) 八条宮の尊影のかたはらに先祖幽齋君の御影を安置せられしよし 八

条宮は智仁親王。幼少に豊臣秀吉の養子となるが、天正十八年(一五九

〇)に親王家を創立して八条宮と称し、翌年親王宣下を受けた。細川幽

齋(一五三四—一六一〇)は三条西実枝より和歌を学び、古今伝受を受

け、智仁親王へこれを伝授した。園林堂には、智仁親王と幽齋の御影が掲げられていた。『桂離宮』『御庭向』に次の記述がある。

本尊楊柳観音画像 後西院帝皇女
宝鏡寺本覚院宮筆

諱徳嚴理豊

両脇ニ御代々尊牌被安置 今八無之慈照院へ被移事

前傍ニ細川幽齋玄旨画像被掛之

古今相伝詠進短冊軸同所被掛之

御披露 いにしへもかはらぬよの中に
こころのたねをのこす言の葉 玄旨

(7) あるに「あり」(女鑑)。

(8) 世をさり給しより百とせもはや二度めぐり来ぬ 文化六年(一八〇九) 八月二十日に幽齋の二百回忌が行われた。

(9) 宮の諸大夫、尾崎縫殿頭積興朝臣 尾崎積興(一七四七—一八二五)。

初め継忠と称し、積興に改名。尾崎家は代々桂宮諸大夫を勤仕した。宮内庁書陵部蔵「桂宮日記」は積興の筆になる。「女鑑」に「積興朝臣」とあるのは誤り。

(10) 侍る「侍り」(女鑑)。

(11) 中の八日 十八日。

(12) しのゝめ 夜明けの頃。「暁をば、たまをしけ、あけぼの、しののめ」と云(能因歌枕)。「しののめのほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」(古今集・恋三・六三七)。

(13) すぐるより「つぐるころより」(女鑑)。

(14) ながめもてつゝ「ながめすて」(女鑑)。

(15) 朱雀野 朱雀大路あたりの田野と化した地帯。「朱雀といふほとりよ

りおりあつつ行、此野べより見たせば、よもの山々霞たちこめて、い
とど心ものどかなる野遊なり」(烏丸光胤「桂紀行」宝暦三年三月)。

(16) 末広き田面のいなばのあしたの露「昨日こそ早苗取りしかいつのま
に稲葉そよぎて秋風の吹く」(古今集・秋上・一七二)のように、「稲葉」
は一般的に秋風を想起させる。「あしたの露」は儂い命を例えることが
多いが、例えば『紫式部日記』には「ほのうちきりたるあしたの露もま
だ落ちぬに……」として早朝が表現される。

(17) ふき過る「吹わくる」(女鑑)。

(18) 植わたす……「うゑわたすふもとのさなへ一方になびくとみれば山
風ぞふく」(衆妙集・詠百首和歌・二七「早苗」)、「植ゑわたす山田の
早苗はるばるとなびくも涼し露の夕かぜ」(新明題和歌集・卷二・夏・
一三六二)を踏まえる。

(19) かつら川の渡り 桂川は京都西部に流れる川。『山城名跡巡行志』に
「桂・渡 舟渡也昼夜俱渡河東高桂村也」とある。「野もせはるる行ほど桂
の渡になりぬ」(家仁親王「桂紀行」宝暦五年三月)。

(20) 御たちの人出むかへり 記述無し(女鑑)。

(21) 四方をながむれば「四方のながめも」(女鑑)。

(22) いましはと……「七夕はおもひしらなん天の河いそくわたりに舟を
かしたる」(新後拾遺集・雑秋・七一七)などを参考とするか。「かつら
人わたす小舟も河づらの宿にといそぐ心をしれ」(家仁親王「桂紀行」
宝暦五年三月)。

(23) にぞ「にて」(県立図書館本)。

(24) 地ぞう堂 御陵御茶屋にある地藏堂。文化二年から翌三年にかけて改

築されたという(桂宮日記)。

(25) 文武天皇の御代、染どのの後の建立にて「文武天皇」は文徳天皇の誤り。文徳天皇后明子(染殿后)が信仰し、清和天皇を出産したと伝えられる。

(26) 積興朝臣「綾興朝臣」(女鑑)。

(27) 物語しよし聞は「物語しよし聞に」(県立図書館本)、「ものがたりをきくに」(女鑑)。

(28) まうでめ「まゐりてめ」(女鑑)。

(29) 山道なれば、かろうじていたりつく 地蔵堂から桂離宮までの道程は約二キロメートル。

(30) いたりつく「いたり侍りつ、」(県立図書館本)、「いたりつき侍りぬ」(女鑑)。

(31) 地ぞう「さて地藏尊」(女鑑)。

(32) 世にひろき…… 第三句「今こゝに」、第五句「すゑものどけき」(女鑑)。「いかにしてころのすゑをあらはさんかけてちかひしむごもりのかみ」(新撰六帖・第五帖・一五五六「ちかふ」)。

(33) 右の方をみれば「右の方に」(女鑑)。

(34) 文武天皇とするされたり (25) 参照。

(35) この御堂のかたはらなる家居 地藏堂の脇に「潤身」と称する書院があったとされる(西和夫『近世の数寄空間―洛中の屋敷、洛外の茶屋』中央公論美術出版、一九八八年)。

(36) 家居に「家にて」(女鑑)。

(37) 手あらひ、口すゞぎ「御玄関八重 前は敷瓦なり。通用門の内、御台

所北にあり。西表なり。同高堀傍に石手洗鉢あり」(桂離宮「桂御別業之記」)。

(38) 積興朝臣「綾興朝臣」(女鑑)。

(39) 祠堂 (5) 参照。

(40) 拝す「拝奉る」(県立図書館本)。

(41) しらざりき……「葉すゑの露の身」は儂い身の上をいうが、ここでは幽斎の後裔を「葉すゑ」と表現し、古を偲ぶ。「明け暮れは昔をのみぞしのお草葉末の露に袖濡らしつつ」(新古今集・雑中・一六七四)。

(42) 拝し終りて「拝み終へて」(女鑑)。

(43) おもふに「おもふ」(女鑑)。

(44) 拝ることとも「拝むは」(女鑑)。

(45) ほどゞ、「ほどぞ」(女鑑)。

(46) のべ侍る「のべ侍り」(女鑑)。

(47) 言の葉に…… 園林堂に掲げられる、智仁親王への伝授証明状に添えた幽斎の歌「古も今もかはらぬよの中に心のたねをのこすことの葉」(衆妙集・雑部下・五九九)を念頭に置く。

(48) つくせし「つくし、」(女鑑)。

(49) 池の面、木石にいたるまで、たぐひなし「御堂前北池端に桜樹一種あり。是、奈良の都の八重さくらの詠歌、同種を移し植させ給ふとなり」(桂離宮「御庭向」)。

(50) ほどに「ほどには」(女鑑)。

(51) なを風情も「風情も」(女鑑)。

(52) おかしく「をかし」(女鑑)。

(53) さす樟の……『桂離宮』『御庭向』に「家仁親王御詠」として「桂川
なみの小舟のみなれさほ月のいくよかごき出すらむ」とある。第二・三
句「しづくもすぎしいけの面に」(女鑑)。

(54) おほみきなど給ひければ「かれ飯などとり出て盃いく度か手にふる
る。それより庭の小舟にうち乗て池の面をこぎめぐる、いと興あり」

(家仁親王「桂紀行」宝暦五年三月)。

(55) もよふして「もよほし侍りて」(女鑑)。

(56) ゆふ日影……「月の桂」の連想から「さかづき(盃)」に「月」を掛
ける。

(57) かへりあるに「館のうちにかへりいるに」(女鑑)。

(58) よりある「よるのもの」(女鑑)。

(59) かうらん 橋の欄干。

(60) 飛くるに「飛くる」(県立図書館本)、「飛ける」(女鑑)。

(61) おもひいで、「思ひいでし」(県立図書館本)、「おもひいで」(女鑑)。

(62) そひぬれば「おひぬれば」(女鑑)。

(63) 飛ぼたる……第五句「さぞとしらる、」(女鑑)。「里の名の月のか
つらにとぶほたるくるるかたにやひかりそふらん」(歌枕名寄・巻二・

六五四「蛩」とあるように、桂は蛩の名所であった。「日もやうやう暮
かりけるに、蛩を見んとておなじとこにやすらふ。かくてくれつか
たに成ければ、蛩とびいでて、いとすずしく見ゆる」(家仁親王「桂紀
行」宝暦三年五月)。「谷の光」を詠む歌に、「ほたるとぶいはかきしみ
づおのづから谷のひかりやよるをまつらむ」(雲窓臈語・二九「潤底蛩
火」)、「春をだによそなる谷の光には水の蛩をみるもはかなし」(雪玉

集・三八八三「潤底蛩火」などがある。

(64) いとゞめかるれば「いとめかるれば」(県立図書館本)、「いとど」(女
鑑)。

(65) 更ぬべしと「ふけぬべし」(女鑑)。

(66) かへるべき……「かへるべき方もおぼえず涙河いづれかわたるあさ
せなるらむ」(後撰集・恋四・八八八)を踏まえつつ、帰途を詠む。第
五句「ながめそへけり」(女鑑)。

(67) こし「越し、」(女鑑)。

(68) きしには「岸に」(女鑑)。

(69) くらからぬ「くからず」(女鑑)。

(70) 桂川……「鵜舟こぐ夜河の波の音ふけてうつるも涼しかり火の影」
(新千載集・夏・二九〇)を踏まえる。

(71) おほる 書き誤りか。「おもほゆる」(県立図書館本・女鑑)。

(72) いとゞだに「いとゞ」(女鑑)。

(73) 家居にかへれば「家にかへりつきぬれば」(女鑑)。

(74) ほどにもなり侍ぬ「ほどにもなり侍る」(県立図書館本)、「ほどにな
り侍りき」(女鑑)。

(ひだか あいこ／熊本大学大学院人文社会科学研究所)